
地震史料としての日記の性質

—19 世紀の武蔵国多摩地域の地震を事例に—

片桐 昭彦

(東京大学地震研究所)

はじめに

本稿の目的は、歴史地震研究に用いる史料としての日記の性質や特徴、注意点について、実際に事例をとりあげながら考えることにある。

歴史地震の研究にとって日記は重要な史料である。日記は、記主が当時実際に経験、見聞した記事には信頼がおけるとともに、年月日だけでなく時間帯までわかるものも多い。それゆえ日記は、史料批判の必要性が少なく、歴史学を専門としない方々にとっても比較的使いやすく有効な史料と言えよう⁽¹⁾。しかし、日記はもちろん万全な史料ではない。

中世の日記は、記主である公家や寺社などが集住した京都を中心に畿内に偏って多く残される。そのため、地方でおきた地震を京都の公家の日記から読み解かなくてはならないことがある。記主本人の経験した地震ならともかく、伝聞や風聞には偏差があり、記主の興味・関心も日々変化する。まして他所でおきた地震などは余程のことでないとならぬと記さないし書き忘れることも多いだろう。宇佐美龍夫氏が「古い日記に地震記事がないからといって、地震がなかったといえないのはごく当り前のことである」と述べるとおりである⁽²⁾。

しかし、中世に比べて近世の日記には、幕府や諸藩の武家による公的な日記が加わるとともに、とりわけ近世後期には学者や文人だけでなく町人、村役人、女性にいたるまで全国各地の幅広く様々な人が記した日記が残される。したがって近世後期には、地震の発生した地域で記された日記が全国各地に残されているだけでなく、一つの地域に同時代の日記が複数残されることも多い。

そこで本稿では検討材料として近世後期の武蔵国多摩地域に残された日記をとりあげる。

多摩地域には、18～19 世紀後半に記された日記が管見のかぎり 28 点ほど確認される⁽³⁾。このうち地震の記事が少しでも記されるものは 14 点あるが、残る半数ほどの日記には、天候が記されても地震の記事がみられない。2 人に 1 人しか日記に地震のことを記さない点は注目されよう。

さて、地震記事のみられる日記の記主は、村の名主・組頭等がほとんどであるが、神社の宮司や村医者などもいる。ただ、地震記事のある日記でも、安政江戸地震のような大地震しか記されない日記もあるため、ある一定の期間において起きる数々の地震を考えるには、できるだけ小規模な地震まで丹念に注意深く記した日記が必要となる。

本稿では、中藤村（現武蔵村山市）に居住した神職で陰陽師の指田藤詮が、天保 5 年（1834）から明治 3 年（1870）まで 37 年間を記述した日記である「指田日記」⁽⁴⁾ を軸として、同時期に地震記事のある他の日記 8 点をとりあげたい。次頁に掲げた図は、これらの日記 9 点（A～I）の記主の所在地をそれぞれ示したものである。

Aは、多摩郡本宿村（現府中市）の組頭内藤治右衛門（重喬・重英の2代）が享和2年（1802）から天保7年（1836）まで書き継いだ「県居井蛙録」⁽⁵⁾、Bは、上恩方村（現八王子市）の年寄尾崎次郎右衛門が文政13年（1830）から慶応4年（1868）まで記した「尾崎日記」⁽⁶⁾、Cは、前掲の「指田日記」、Dは、小野路村（現町田市）の小島家当主が4代にわたり天保7年（1836）から大正10年（1921）まで書き継いだ「小島日記」⁽⁷⁾、Eは、柴崎村（現立川市）の名主鈴木平九郎が天保8年（1837）から安政5年（1858）まで記した「公私日記」⁽⁸⁾、Fは、連光寺村（現多摩市）の名主富沢家当主が天保14年（1843）から明治41年（1908）まで書き継いだ「富沢家日記」⁽⁹⁾、Gは、南小曾木村小布市（現青梅市）の百姓市川庄右衛門が安政6年（1859）から明治30年（1897）まで記した「市川家日記」⁽¹⁰⁾、Hは、坂浜村（現稲城市）の市村氏が安政5年（1858）に記した「年中日記帳」（「市村家日記」）⁽¹¹⁾、Iは、日野本郷（日野宿、現日野市）の組頭河野清助が慶応2年（1866）から明治45年（1912）まで記述した「河野清助日記」⁽¹²⁾である。

これらの日記9点を比較検討し、19世紀半ば前後の多摩地域の地震の頻度や規模、被害などについて考察するとともに、歴史地震研究に用いる史料としての日記の性質や特徴を確認し、日記を地震研究に用いる際の問題点、注意点について考えてみたい。

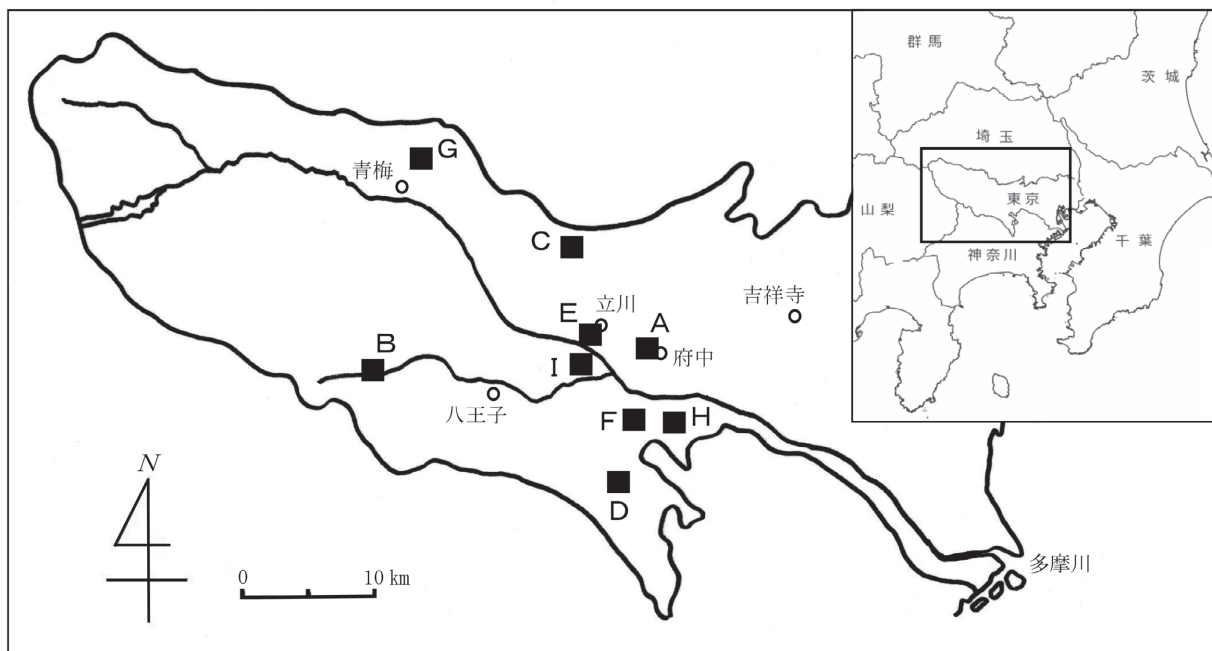


図 多摩地域における日記の記主の所在地（電子国土webを基図に加筆）

1 日記にみる地震の表記

1 では、日記における地震の表記について考える。別掲の表は、前述した多摩地域に残る日記9点の地震記事の有無を示したものである。

「指田日記」には記述のある37年間で67回の地震の記事がある。いずれも記主である指田藤詮が感じた地震、すなわち指田の居所のある中藤村（図C）で起きた地震である。67回の地震記事のうち、地震は「大地震」（6回）、「ヨホドノ地震」（1回）、「地震」（60回）で表記される。地震の強弱の尺度を「大地震」と「地震」の二段階で使い分けていることがわかる。

その点は、例えば、嘉永6年2月2日（1853年3月11日）条には「四ツ時、地震、小田原大地震」と記されており、記主所在の中藤村は「地震」だが小田原では「大地震」というように、地震の規模を比較する形で相対的に記していることからわかる⁽¹³⁾。他の8点の日記の地震表記につ

表 多摩地域の日記の地震記事の有無

△:小地震 ○:地震 ◎:大地震 ◎+:被害のある大地震
 数字:地震回数 ※:他地域の地震記事あり 網掛け:記載期間

年月日	西暦	A	B	C	D	E	F	G	H	I
天保5年7月12日	1834年8月16日			○						
天保6年2月11日	1835年3月9日			○						
天保6年4月18日	1835年5月15日	○		◎						
天保6年6月25日	1835年7月20日	○								
天保6年6月28日	1835年7月23日			○						
天保6年閏7月17日	1835年9月9日	○								
天保6年閏7月18日	1835年9月10日			○						
天保6年閏7月19日	1835年9月11日	○		○						
天保6年9月13日	1835年11月3日			○						
天保6年9月14日	1835年11月4日			○						
天保6年10月5日	1835年11月24日			○						
天保6年10月15日	1835年12月4日			○						
天保7年2月9日	1836年3月25日				○					
天保7年2月15日	1836年3月31日	○		○	○					
天保7年2月17日	1836年4月2日				○					
天保7年3月1日	1836年4月16日			○	○					
天保7年3月28日	1836年5月13日			○						
天保8年5月6日	1837年6月8日			○						
天保8年10月8日	1837年11月5日			○						
天保8年12月9日	1838年1月4日			○						
天保9年2月2日	1838年2月25日			○						
天保9年2月12日	1838年3月7日			○						
天保9年2月29日	1838年3月24日			○						
天保9年閏4月11日	1838年6月3日				○					
天保9年5月20日	1838年7月11日			◎						
天保9年5月22日	1838年7月13日			○						
天保9年8月21日	1838年10月9日			○						
天保9年10月25日	1838年12月11日			○						
天保9年11月18日	1839年1月3日			○						
天保10年12月27日	1840年1月31日			○						
天保11年正月12日	1840年2月14日			○		○				
天保11年正月晦日	1840年3月3日					○				
天保11年5月17日	1840年6月16日			○						
天保11年8月13日	1840年9月8日			○						
天保11年12月23日	1841年1月15日			○						
天保11年12月27日	1841年1月19日			○						
天保12年正月23日	1841年2月14日			○						
天保12年10月24日	1841年12月6日			○						
天保13年9月16日	1842年10月19日			○						
天保14年2月9日	1843年3月9日			◎		◎+				
天保15年9月24日	1844年11月4日			○						
弘化元年12月27日	1845年2月3日			○						
弘化3年4月22日	1846年5月17日			○						
弘化3年12月8日	1847年1月24日		○4,5	◎		◎				
弘化4年正月28日	1847年3月14日			○						
弘化4年2月4日	1847年3月20日			○						
弘化4年2月5日	1847年3月21日			○						
弘化4年3月24日	1847年5月8日		○	○※		※				
弘化4年11月9日	1847年12月16日			○						
嘉永元年5月9日	1848年6月9日			○						
嘉永元年8月26日	1848年9月23日			○						
嘉永2年4月15日	1849年5月7日			○						
嘉永4年2月21日	1851年3月23日			○						
嘉永5年4月29日	1852年6月16日			○						
嘉永6年2月2日	1853年3月11日		○2	○		◎2※				
嘉永7年11月4日	1854年12月23日			◎/○ 2,3※		◎+/△※				

年月日	西曆	A	B	C	D	E	F	G	H	I
安政2年2月12日	1855年3月29日			○						
安政2年10月2日	1855年11月11日		◎+	◎+ ※		◎/ △10余				
安政2年10月3日	1855年11月12日			○		※				
安政2年10月6日	1855年11月15日			○3,4						
安政2年10月7日	1855年11月16日			◎						
安政3年10月7日	1856年11月4日			○		○/△				
安政5年2月12日	1858年3月26日								○	
安政5年2月13日	1858年3月27日								○	
安政5年2月25日	1858年4月8日			○					◎	
安政5年2月28日	1858年4月11日								○	
安政5年2月晦日	1858年4月13日								○	
安政5年3月5日	1858年4月18日								○	
安政5年3月8日	1858年4月21日								○	
安政5年3月10日	1858年4月23日								○	
安政5年4月10日	1858年5月22日								○	
安政5年4月24日	1858年6月5日								○	
安政5年5月4日	1858年6月14日								○	
安政5年5月6日	1858年6月16日								○	
安政5年5月7日	1858年6月17日								○	
安政6年6月4日	1859年7月3日			○						
安政7年8月22日	1860年10月6日						○			
万延2年2月14日	1861年3月24日						◎			
万延2年2月16日	1861年3月26日						◎			
万延2年8月25日	1861年9月29日				○		◎			
文久元年9月17日	1861年10月20日			○			◎+			
文久元年10月8日	1861年11月10日							○		
文久元年11月2日	1861年12月3日						○			
文久2年2月2日	1862年3月2日						○			
文久2年3月5日	1862年4月3日							◎		
文久2年4月8日	1862年5月6日						◎			
文久2年9月8日	1862年10月30日						○			
文久2年9月11日	1862年11月2日				○1,2		○			
文久3年正月4日	1863年2月21日				○					
元治元年5月2日	1864年6月5日						◎			
元治元年5月3日	1864年6月6日			○	◎					
元治2年正月9日	1865年2月4日						○			
元治2年正月14日	1865年2月9日			○						
元治2年2月1日	1865年2月26日			○						
元治2年2月3日	1865年2月28日			○			◎			
慶応2年正月2日	1866年2月16日									○
慶応2年4月14日	1866年5月28日									○
慶応2年5月26日	1866年7月8日									○
慶応2年9月10日	1866年10月18日									○
慶応2年10月26日	1866年12月2日									○
慶応2年11月12日	1866年12月18日									○
慶応3年5月1日	1867年6月3日									○
慶応3年5月23日	1867年6月25日			○						
慶応3年5月24日	1867年6月26日									○
慶応3年10月11日	1867年11月6日						○			
慶応4年9月12日	1868年10月27日			○						○
慶応4年12月11日	1869年1月23日									○
慶応4年12月26日	1869年2月7日									○
明治2年7月5日	1869年8月12日			○						

A:「県居井蛙録」 B:「尾崎日記」 C:「指田日記」 D:「小島日記」 E:「公私日記」
F:「富沢家日記」 G:「市川家日記」 H:「安政五年市村家日記」 I:「河野清助日記」

いても、ほとんどが「大地震」と「地震」で使い分けている。

しかし、柴崎村(図E)の「公私日記」には、大地震後の余震に対して「小地震」「小震」という表記が用いられている。後述するように、これは嘉永7年11月4日(1854年12月23日)の東海地震⁽¹⁴⁾、および安政2年10月2日(1855年11月12日)の安政江戸地震の後におきた余震であると考えられる。このような巨大地震を経験した記主鈴木平九郎は、地震の大きさの尺度を「大地震」と「地震」という二段階では表現できなくなり、新たに「小地震」「小震」を加え三段階に広げて表現したと言える⁽¹⁵⁾。

但し、他の日記も同様であるが、嘉永7年11月4日・安政2年10月2日の巨大地震についても他の大地震と同様に「大地震」と表記している。巨大地震が「大地震」の尺度基準に変わるのである。つまり、それまで経験したことのない巨大地震が発生した前と後では、同じ表記の「大地震」であってもその大きさは全く異なるのである。日記は、経験主観的な記録であるので、同じ言葉を使ってもその意味する実際は、同じものとは限らず、移り変わるものなのである。

したがって、日記を地震研究に用いる際には、「大地震」「地震」の表記だけでなく、その地震にともなう具体的な被害や揺れの大きさのわかる記述を考慮する必要がある。別掲の表には、日記の表記にしたがい、小地震(小震)は「△」、地震は「○」、大地震は「◎」、被害記事のある大地震は「◎+」で表記したが、それぞれの地震の大きさについては個別に検討しなければならない。

2 日記にみる地震の大きさ

2では、日記に記される多摩地域の具体的な地震の大きさについて考える。日記の「大地震」の記事には、被害の状況や揺れ具合が記されることがあり、日記の記主の所在地近辺における地震の大きさを知る目安となる。

まず、本稿で軸とする中藤村の「指田日記」(C)には、安政2年(1855)の安政江戸地震時の記事以外に「大地震」にともなう揺れの強弱に関わる具体的な記述はみられない。

しかし、柴崎村の鈴木平九郎が記した「公私日記」(E)には、次のような地震の大きさを知りうる記述がみられる。

(史料1) 天保14年2月9日条

九日、初午、(中略)、今四ツ半時頃、大地震、近年ニ覚なし、

(史料2) 弘化3年12月8日条

八日、曇晴、午後、地震あり、二三年前初午の地震ほとニ而、手桶の水少々こぼるゝほど也、

(史料3) 嘉永6年2月2日条

二日、曇晴、南北風あり、午前、地震式行、近年之大震ひ也、

(史料4) 嘉永7年11月4日条

四日、(中略)、今日四ツ時頃、大地震、四十式ヶ年来覚なし、夫方ゆり返し之小地震、昼之内八九返、夜中明朝江かけ十四五返也、

史料1は、「公私日記」の天保14年2月9日(1843年3月9日)の記事であり、この日の「四ツ半時頃」に地震があり、近年経験しないほど大きな地震であると感じたことがわかる。この日の地震は、「指田日記」でも「大地震」と記しており、「昼四ツ」と記していることから、「四ツ半時頃」は午前10時頃であることがわかる。

史料2は、弘化3年12月8日(1847年1月24日)の記事である。この日の午後におきた地震は、

「二三年前初午の地震ほと」、すなわち史料1の天保14年の地震時と同じ程度に感じる地震であり、さらに手桶の水が少しこぼれるほどの地震であったことがわかる。

史料3は、嘉永6年2月2日（1853年3月11日）の記事であり、この日の午前には近年で最大クラスの地震が2回起きたとしている。この時の地震は、「指田日記」では前述のとおり「地震、小田原大地震」と記される。同じ多摩地域の地震でも「公私日記」は「大地震」、「指田日記」は「地震」という表記の違いがあるが、「指田日記」では小田原を「大地震」と表すため、地元地域は「地震」と控えめに表現した可能性もあるので注意が必要であろう。

史料4は、嘉永7年11月4日（1854年12月23日）の記事である。前述したように、この日の四ツ時頃（午前9時～11時）におきた地震は、一般的に安政東海地震として知られるが、日記には「四十式ヶ年来」、42年来経験のないほどの大地震であったとする。その後、さらに余震（「ゆり返し之小地震」）が昼に8、9回、夜から翌朝までに14、5回おきたと記している。

さて、ここに記された42年前の大地震とは、文化9年11月4日（1812年12月7日）に武蔵・相模東部を中心に発生した地震と考えられる⁽¹⁶⁾。文化4年（1807）生まれの平九郎は、文化9年の地震を経験あるいは伝聞していたとみられ、この地震も近年の大地震よりも大きな地震であったと認識していたことがわかる。なお、この時の地震は「指田日記」には「大地震、夜両三度地震」とあるのみで余震の回数も「公私日記」とは異なる。

以上、「公私日記」によれば、文化9年（1812）11月4日の地震以来、大きな地震はなかったが、天保14年（1843）2月9日と弘化3年（1847）12月8日には手桶の水が少しこぼれるほどの近年にない地震があり、嘉永6年（1853）2月2日には再び近年では大きな地震が同日2回起き、翌7年（1854）11月4日には42年ぶりの大地震が発生し昼夜に余震が続いたことがわかる。

また、同じ多摩地域の日記であっても中藤村の「指田日記」の記述と比べると、嘉永7年11月4日の地震では余震の回数が異なっていたように、日記の記主により地震の感じ方や大きさの尺度基準に相違がみられる。あるいは当然ながら、実際に多摩地域内でも柴崎村（現立川市）と中藤村（現武蔵村山市）で地震の揺れに違いがみられた可能性もあろう。

ただ、いずれにしても少なくとも1812年から1854年までの間に多摩地域では「大地震」と感じられる地震は起きて、日記に特記するような被害はなかったと言える。

3 日記にみる安政江戸地震時の被害

前述のように、多摩地域では日記に特記するような地震被害はなかったが、安政2年10月2日（1855年11月11日）の安政江戸地震では被害のあったことが日記に記される。

（史料5） 安政2年10月2日条

二日、夜四ツ時、大地震、倉庫破裂ス、明方迄七八度ニ及ブ、江戸所々焼、吉原近辺別而大地震、火事、存命ノ者十ニシテ二三ニ過キズ、江戸中ニテ二十万余ノ死人ト沙汰アリ、

（史料6） 安政2年10月3日条

三日、今朝も地震、昨夜、十王堂石碑十ニシテ九ツ倒ル、予カ家ノ碑一モ不倒、

（史料7） 安政3年9月17日条

十七日、真福寺境内ノ百観音、去十月ノ地震ニテ数十軀破裂シケル故、彩色修覆成、今日入仏供養アリ、

史料5～7は、いずれも「指田日記」の記事である。史料5は、安政2年10月2日の記事であり、

夜四ツ時（午後9時～11時）に「大地震」があり、倉庫が「破裂」したとし、翌日明け方まで余震が7、8回起きたとする。倉庫の「破裂」がどの程度の被害か判然としないが、少なくとも文字どおり壁に割れ目、裂け目が入るほどの被害はあったことがわかる。

史料6は、翌3日の記事であり、朝にも地震があったとする。そして、昨夜の地震により十王堂（現武蔵村山市神明）にある石碑の10基あるうち9基が倒れたとしており、ほとんどの石碑が倒れたことがわかる。

史料7は、翌安政3年9月17日の記事である。これによれば、昨年10月の地震により真福寺（現武蔵村山市中藤）の境内にある百観音のうち数十軀が「破裂」したので、彩色修復を施して、この日に入仏供養を行ったとのことである。「破裂」がどの程度の被害をさすかは不明ながら、少なくとも観音立像が倒れるなどして割れ目、裂け目が入り、修復や彩色に一年かける必要があるほど損壊したことがわかる。さて、この観音像被害の記事は、地震発生日や直後にはみられず、翌年にたまたま入仏供養が行われたから記された点は重要である。当然ながら地震の被害箇所がすべて日記に記されるわけではないのである。

さて、安政江戸地震時の「指田日記」の記事をみたが、それまで地震には敏感に丁寧に記しながらも被害を記さなかった指田藤詮が、この地震では具体的に記している点は注目される。では、他の日記では安政江戸地震時をどう記しているだろうか。

（史料8） 安政2年10月3日条

三日、（中略）、昨夜四ツ時過、大地震、此辺灯燈不消、棚之もの不落ほとニ而、去年方ハゆるやかなりといへとも、夜中之儀ニ而騒動大方ならず、夫方小震十余行、夜明迄諸人寝ニ不附、最初大震之後直ニ東方明し、必定江戸大火之やうす也、（後略）

史料8は、先ほどもとりあげた柴崎村の「公私日記」（E）の安政2年10月3日、地震翌日の記事である。これによれば棚に置いた物は落ちない程度で、昨年の地震（嘉永7年11月4日の東海地震）よりは緩やかだったとする。ただ、夜中に地震が起きたため騒ぎは並大抵ではなく、余震（「小震」）が十回余り起きたので、夜明けまで寝られなかったとする。そして、江戸の大火の様子や被害の記事が続くが以後は省略した。「公私日記」によれば、少なくとも記主鈴木平九郎の所在地は、昨年11月4日の東海地震よりは緩やかであったとする。

（史料9） 安政2年10月2日条

二日、同（曇）、此夜四ツ時、大地震致ス、此辺ハ格別之事も家居等之破損も無之候、江戸ハ大地しんニ而ゆりこハし、其上出火いたし怪我人死人等多分有之由、委しく承り次第追而書頭す、

（史料10） 安政2年10月条末尾

当月二日、夜四ツ時過、大地しんにて所々夥敷趣なり、此辺ハ格別之事もなく、居宅杯之破損もなく、世間之風聞よりハすくな□□、江戸之事ハ言語ニつくしかたく、大名、御旗本、町家、所々ゆりこハし、其上出火之場所も多分有之、死人怪我人等之儀も数相知趣、本所、深川、吉原大くつれ候様子、（後略）

史料9・10は、上恩方村の尾崎次郎右衛門が記した「尾崎日記」（B）の記事である。史料9は、安政2年10月2日条であり、「大地震」としながらも近所では特別な被害も家屋などの破損もなかったとするが、江戸では出火し怪我人や死人が多かったとのことなので、詳しくわかり次第追って

書くとする。史料 10 は、その追って書いた記事であり、10 月末日である 29 日の後に記される。ここでも、大地震により各地では夥しい様子だが、この辺りではそれほどのこともなく居宅などの破損もなく、世間の風聞に比べて被害は少ないと記し、その後の記事のほとんどは江戸の被害に費やされ、後略部分にはさらに江戸の火事被害軒数などを書き上げている。

したがって、日記の記事によると、安政 2 年 10 月 2 日の安政江戸地震では、柴崎村（現立川市）や上恩方村（現八王子市）はそれほどの被害はなく⁽¹⁷⁾、それに比べて「指田日記」の記主所在地である中藤村（現武蔵村山市）では被害があったことから、多摩地域内でも揺れの大きさに違いがあったことがわかる。

4 日記にみる安政江戸地震以後の表記の変化

1 において「公私日記」を用いて前述したとおり、経験したことの無い巨大地震が発生した前後では、日記の記主の地震の認識や表記の基準は変わるのであろうか。その点について、安政江戸地震を事例に考えてみたい。

表をみるとわかるように、「指田日記」(C)には、安政 2 年 10 月の安政江戸地震まで丹念に記されているが、それ以降、地震の記事が減少している。減少したぶん地震の発生が減ったかと言えばそうではない。

例えば、多摩地域内の連光寺村の「富沢家日記」(F)、坂浜村の「市村家日記」(H)、日野本郷の「河野清助日記」(I)の各日記に記される地震が、「指田日記」には記されていない。とくに「富沢家日記」で「大地震」と記す万延 2 年(1861) 2 月 14 日、同 16 日、万延 2 年 8 月 25 日、文久 2 年 4 月 8 日の地震さえも記されていないのである。

先ほど触れた「公私日記」の例も考慮すると、「指田日記」の記主指田藤詮は、それまでは小さな地震まで記述していたが、安政江戸地震のような巨大地震を経験し、それ以後はよほどの地震でない限り記さなくなったのではなかろうか。この点は、「指田日記」が安政江戸地震時以後の地震をすべて「地震」と記していること、さらに、他の日記では安政 5 年(1858) 2 月 25 日、文久元年(1861) 9 月 17 日、元治元年(1864) 5 月 3 日、元治 2 年(1865) 2 月 3 日条で「大地震」と記している地震であっても、「指田日記」は「地震」と記していることからもうかがえよう。

いっぼうで視点をかえると、「指田日記」の地震記事が減るのに対して、前掲の「富沢家日記」、「市村家日記」、「河野清助日記」では丁寧に地震の記事を書いていることがわかる。とりわけ「市村家日記」は一年間分しか残されていないが 13 回の地震記事がある。つまり、安政江戸地震のような巨大な地震を経験することで、「指田日記」とは反対に、「市村家日記」などのように地震にたいし敏感に反応して日記に書き残そうとする記主も増えたのではなかろうか⁽¹⁸⁾。

したがって、安政江戸地震のような巨大地震の経験は、各日記その記主の地震への認識にさまざまな変化を及ぼし、地震記事の有無・増減や、地震の強弱を示す尺度表記を変えたのである。日記の記主は、つねに一貫した基準をもって地震を記述しているわけではなく、その経験や心境などによって表記の有り様を変化させることを考慮しなければならない。

おわりに

本稿は、歴史地震研究に用いる史料としての日記の性質や特徴、問題点を考えるために、19 世紀半ば前後の武蔵国多摩地域に残る日記 9 点の地震記事を事例にとりあげて比較検討を行った。その結果、明らかになったこと、指摘したことは以下のとおりである。

多摩地域でおきた地震については、① 諸日記によると、1812～1869 年の間に多摩地域でおきた最大級の地震は、文化 9 年（1812）11 月 4 日、嘉永 7 年（1854）11 月 4 日、安政 2 年（1855）10 月 2 日のものであったが、全体的には被害が少なかったこと、② 但し、中藤村（現武蔵村山市）では安政 2 年の地震で被害がみられたが、柴崎村（現立川市）・上恩方村（現八王子市）では被害はなく、柴崎村では安政 2 年より嘉永 7 年のほうが揺れを大きく感じていたことから、多摩地域内でも場所により地震の大きさは異なっていたと考えられることである。

歴史地震研究に日記を用いる際の注意点としては、① そもそも地震記事のない日記は多くみられ、日記に地震記事を書くか書かないかは記主により様々であること、② 日記の記事は、経験的主観による部分の大きな相対的なものであり、とりわけ安政江戸地震のような巨大地震を記主が経験した後の日記は、地震記事の有無や増減だけでなく、地震の強弱を示す尺度表記などにも変化がみられることである。

したがって、一冊の日記のみを史料として歴史地震を研究する際には、より慎重に分析しなければならない。そして、同じ時代、同じ地域の地震であっても、一冊の日記だけでなく、できるだけ複数の多くの日記の記事を比較検討して相対的に捉えていくことが必要であると言えよう。

註

- (1) 地震史料としての日記の有用性については、西山昭仁「近世史料に記された地震と地震災害」（『新しい歴史学のために』284号、2014年）などを参照のこと。
- (2) 宇佐美龍夫「古文書の利用に当たっての私見」（宇佐美龍夫他編著『日本被害地震総覧 599-2012』付録2、東京大学出版会、2013年）。なお、同文において宇佐美氏は「古文書に書いてないことを理由に推理を進めてはならない」と記している。至極当然のことであるが、歴史学者でも陥りやすい過ちへの警告であり重要であろう。
- (3) 伊藤好一「近世多摩地域史研究と日記史料」（『多摩のあゆみ』32号、1983年）、高木俊輔『近世農民日記の研究』（塙書房、2013年）などを参照した。
- (4) 「指田日記」（『指田日記』（武蔵村山市文化財史料集第11集）、武蔵村山市教育委員会、1994年）。
- (5) 「県居井蛙録」（府中市郷土の森博物館編『博物館研究資料集第1集 県居井蛙録』、府中市郷土の森博物館、2015年）。
- (6) 「尾崎日記」（八王子市郷土資料館編『郷土資料館資料シリーズ42～45 尾崎日記』、八王子市教育委員会、2003年～2005年）。
- (7) 「小島日記」（小島日記研究会編『小島日記』1～3、25～33、小島資料館、1984年～2006年）、本稿では現在翻刻刊行される天保7年～9年（1838）、万延元年（1860）～慶応4年（1868）の記事のみ用いた。
- (8) 「公私日記」（公私日記研究会編『鈴木平九郎公私日記〔改訂版〕』1～5、立川市教育委員会、2011年～2015年）。
- (9) 「富沢家日記」（国文学研究資料館史料館編『史料叢書5 農民の日記』、名著出版、2001年）。本稿では翻刻される天保14年～弘化5年（1848）、安政7年（1860）～明治2年（1869）の記事のみ用いた。
- (10) 「市川家日記」（青梅市郷土博物館編『青梅市史史料集第46号 西多摩郡人物誌 身ノ上一代記 法鑑 市川家日記』、青梅市教育委員会、1996年）。
- (11) 「安政五年市村家日記」（桜井昭男「〔史料紹介〕安政五年市村家日記」『稲城市文化財研究紀要』1号、1998年）。
- (12) 「河野清助日記」（『河野清助日記』1・2、日野市教育委員会、1997年・2000年）。
- (13) もちろん小田原で大地震であったという情報は、即日入手できたとは考えにくく、「小田原大地震」部分は追筆である可能性が高い。
- (14) 嘉永7年11月4日に発生した地震であるが、一般的に同年11月27日に改元した新年号「安政」を冠して「安

政東海地震」と呼ばれる。

- (15) 例えば、豊後国日田（現大分県日田市）の豪商広瀬久兵衛の日記（東京大学史料編纂所蔵写真帳「日田広瀬先賢文庫史料」所収）によると、久兵衛は、嘉永7年11月5日（1854年12月24日）に府内（現大分県大分市）滞在中に南海地震（一般的に安政南海地震と呼ばれる）を経験し被災するが、それ以降の久兵衛の日記には規模の小さな地震として「微地震」という新たな地震の尺度表記が登場する（安政2年6月21日、同26日、同年7月22日条）。
- (16) 前掲註(2) 宇佐美龍夫他編著『日本被害地震総覧 599-2012』。この地震については、前掲註(5)の本宿村（現府中市）の「県居井蛙録」や、府中の大國魂神社（現府中市）の「六所宮神主日記」（府中市郷土の森編『府中市郷土資料集 10 六所宮神主日記』、府中市教育委員会、1988年）の同日条にも大地震であったことが記されている。
- (17) 安政江戸地震時に多摩地域で大きな被害がなかったことについては、村岸純・矢田俊文「1855年安政江戸地震における多摩地域の被害」（前近代歴史地震史料研究会編『2016年前近代歴史地震史料研究会講演要旨集』、新潟大学災害・復興科学研究所、2016年）でも指摘されている。
- (18) 例えば、前掲註(15)の「広瀬久兵衛日記」では、嘉永7年11月5日の南海地震を経験した久兵衛はそれ以後、「地震有之候由、不覚」（安政元年12月13日条）、「五ツ時頃地震有之候由、小屋ニてハ不心付」（安政2年10月26日条）、「深更地震有之候由、不覚」（安政3年2月15日条）のように、自分では気づかなかった地震まで他人から聞くと丹念に記している。このことは、久兵衛だけでなく周りの人々も地震に敏感になり情報を交換し合っていたことをうかがわせる。